



Title	動物の像を撫でるまじない：しぐさへの認識をめぐって
Author(s)	茶園, 直人
Citation	間谷論集. 2022, 16, p. 41-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91349
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

動物の像を撫でるまじない

——しぐさへの認識をめぐる——

茶圓 直人

〈キーワード〉 しぐさ 縁起物 まじない

はじめに

まじないにおいて、撫でるしぐさは比較的によく見られる。例えば、「ものもらいが下にできた時はホイト、上にできた時はメボという。(中略)またくしの背や腰巻の裾でなでるとなおる」¹といった民間医療として行われていたものや、「バケモノヲ確カメルニハ、手首ヲ サカサニ ナデテ見レバワカル。毛ガハエテ、ザラ／＼シテキル。」²のように化け物を発見する方法としても用いられる。

これらは迷信と呼ばれ、近代化という文脈の中で淘汰されたと言って良いだろう。言い換えれば、これらのまじないは現代まで伝承されず、忘れ去られてしまったと考えられる。しかし、まじないの実践も含めた生活の中で、人々が育んできた認識までもが途絶えてしまったと考えるのは早計ではないだろうか。事実、撫でるしぐさを伴うまじないの中には現代まで受け継がれているものも見られる。例えば、「痛き所をさすりながら云ふ ちゝんぷい／＼御世のおん寶」³とは、1894年に報告されたまじないだが、現代の「痛い痛い飛んでいけ」というまじないの古い型である。

また、撫牛や撫仏など、過去の文献にも見られ、伝統として受け継がれてきた縁起物も忘れてはならない。なぜなら、縁起物に注目した場合、まじない史における撫でるしぐさの重要性はより高くなるからである。後にいくつか例を挙げるが、撫でる縁起物は近年製作、奉納されたものが数多く報告できる。これは撫で

るまじないが現代にも息づいていることを意味し、これまで伝承が途絶えたとされてきたまじないを、撫でるしぐさという視点から再評価できる点で重要であると考えられる。それによって、過去のまじないを現代につながる問題として議論することができるからである。

この点について、倉石忠彦は「身体伝承」という概念を提唱し、その研究の必要性を訴えている⁴。倉石は身体を「社会的・伝承的にもさまざまに機能する文化的存在でもある」として、そうした身体に対する民間伝承を「身体伝承」と称した。倉石の関心は広く、生活文化全般の中での身体であるが、本稿はその中の一研究であると言える。

もちろん、日本民俗学において、身体、しぐさに注目したのは倉石だけではない。しぐさ研究の重要性を最初に説いたのは柳田國男である。柳田は「書いたものだけに依って世の中を知ろうとすると、結局音声や『しぐさ』のどれ位重要であったかを、心づく機会などは無いのである」⁵とし、言語によって書かれた資料だけでなく、音声やしぐさに注目する必要性を説いている。しかしながら、研究史の実態としては指差しなどの各論にとどまっており、しぐさを体系的に捉えようとする研究には立ち遅れが目立つ。

この点に関して、常光徹は『しぐさの民俗学 ―呪術的世界と心性―』（2006年）で次のように語っている。

総じていえば、伝承の実態や類似する資料の紹介、語源、信仰的な意味などについて述べたのが多い。しぐさは自明のものとして扱われていて、そこでの関心は、特定のしぐさが表象する民俗的な意味に向けられている。しぐさ自体、あるいはしぐさという視点から伝承との関係を捉える意識は希薄である。⁶

常光は従来の研究におけるしぐさの扱われ方を批判し、しぐさに力点を置いた俗信研究の必要性を強調する。また、従来の研究が特定のしぐさに限定されていた点も指摘しているが、その問題意識を解決するには、特定のしぐさについての研究を積み上げ、それらを体系的にまとめあげるという作業が必要だろう。

ここまで「まじない」と「縁起物」を特に区別せずに述べてきたが、願望の成就のために撫でるしぐさ必要としている点から、本稿では撫でる縁起物を「縁起物を撫でることによって成立するまじない」とであると考える。そして、それは本稿の分析対象が主に「呪」（まじない）であるということの意味する。「呪」とは柳田國男による民俗資料の三部分類のうちの、第三部心意現象の一つにあたる⁷。そして、俗信を「兆」「応」「禁」「呪」の四つに分類し、「呪」とは、災いの兆候やもしくは、災いが起こってから、これを封じようとするもので、「禁」とは、「～をしてはいけない」という禁止行為であるとしている。また、「兆」とは、未来のことを推測する基礎となるものとし、「応」とは、結果があつてはじめて原因を求めるものとしている。例えば、「鳥の鳴きが悪いと親が死ぬ」が「兆」で、「親が死んだ。昨日鳥の鳴きが悪かったせいだ」は「応」であるという⁸。

以上より、「兆」や「応」は受動的、「禁」は消極的な行動だと特徴づけることができる。それらと対比して考えると、「呪」は世界に対する能動的・積極的な行動であると言える。これはまじないにおける撫でるしぐさの1つの特徴であり、本稿の前提となる認識である。

柳田によってその重要性を強く認められた第三部であるが、妖怪研究が隆盛を誇る一方で、俗信研究は停滞が叫ばれてきた。豊富な事例の蓄積があるにもかかわらず、俗信をその意図ごとに分類した井之口章次⁹などの少数の優れた論考を除き、分析が進んでいるとは言い難い。福澤昭司はこの原因について、小嶋博巳の論考¹⁰を引用して以下のように述べている。

この分野の研究はめざましく進展したとはいいい難く、専門とする研究者の数も少ない。小嶋博巳は研究不振の原因として資料数が膨大な数にのぼること、村落組織や共同祭祀と違って資料と伝承母体の単位的把握が容易でないこと、そして根本的理由として「俗信」概念のあいまいさをあげている。確かに「俗信」の概念規定の相違が研究者間の対話を妨げ、研究を停滞させていることは事実である。そこで、小嶋が「俗信」の指標（メルクマール）として析出した①非体系的性格 ②呪術的性格 ③非権威的性格・周辺的性格は、今後俗信研究者が依拠していかなければならないものと考えられる¹¹。

これに対して、板橋作美は強く反論している。板橋によると、「資料の膨大さは俗信研究のさまたげになるどころか、逆に分析を容易にする」として、典型例を重要視する従来の見方を批判する。典型例を重要視することは「古いほど正しい形の信仰があり、時間がたつにしたがって、くずれた、誤った形のものが発生する」という思い込みが根底にあると指摘している¹²。そして、板橋は俗信を多数の変異形を持った一つの集合とみなし、俗信の背後にある前提や含意を含めた全体を考察することの必要性を述べている。また、伝承母体の問題についても、板橋は全国で収集したデータには一様性があるために問題とならないとする¹³。

このように、板橋は従来の俗信研究を強く批判し、統辞連鎖と範列集合を用いた構造主義的な分析によってその論理構造を明らかにした。その手腕は誠に見事としか言いようがなく、俗信研究を大きく進めることとなった。本稿の立場としては、板橋の方法論は採用しないものの、俗信に対する見方、伝承母体についての考え方を引き継ぎ、俗信の中の「撫でる」という要素が果たしていた役割について考察する。

本稿では、動物の像を撫でることで成立するまじないについて分析し、その中で撫でるしぐさがどのように捉えられているかについて考察する。これは先に述べた常光による研究と意図を同じくするものであり、人々が伝承してきたしぐさや身体についての認識を明らかにするための一研究であると位置付けることができる。すなわち、「手」という身体を用いて行われる「撫でる」というしぐさの意味の一側面を明らかにすることを本稿の目的とする。また、本稿を通じて、これまで常識とされつつも注目されてこなかった撫でる縁起物の諸相の一端を明らかにすることができるだろう。

なお、「撫でる」という語彙について、「摩る」、「擦る」という語彙も同義語として扱うこととする。その理由は、国際日本文化研究センターの「怪異・妖怪伝承データベース」¹⁴や国立歴史民俗博物館の「俗信データベース」¹⁵などを用いて検索し、それらを通して見られた事例の中では特に違いが見られなかったためである。

1. 牛を撫でる

本章では牛の像を撫でるということに注目する。撫でられる牛の像は撫牛と呼ばれ、拙稿「撫牛の初出と展開」にて、その文献上の初出は1746年に保寿軒という人形窯元が発刊した「本家伝来開運撫牛縁起」であると考察した¹⁶。一口に撫牛と言っても、その形態的特徴から大きく2種類に分けられる。まず、図1（筆者撮影）のような、石や銅などで作られ、幅1メートル強という大きな撫牛である。これは現在、天神社をはじめとして多くの寺社で見られる。地藏菩薩のように涎掛けがかけられていることが多く、寺社の参詣客が参詣の折に撫でるものである。

一方で、図2（筆者撮影）のような、幅約15センチメートルという小さな撫牛も少ないながら見られる。この撫牛は黒塗り土焼で作られ、寺社で買い求められるものである。そして、これは参詣客の自宅で撫でるものであり、その効能が発揮され、吉事がもたらされた時には下に座布団を敷くという特徴を持つ。現在は京都府の妙円寺松ヶ崎大黒天や群馬県の高鳥天満宮などごく一部の寺社でしか見られないが、先に述べた拙稿では、撫牛の起源はこちらにあり、近代まではこちらが盛んに信仰されていたと考察した¹⁷。

このように、撫牛は2種類に分けることができるが、本稿では、これらを区別しない立場をとることとする。その理由は、福島県岩角寺や京都府北野天満宮において後者のタイプの小さな撫牛を前者のタイプの大きな撫牛のレプリカとして位置付けて頒布していること、そして、撫牛を指す語が一つしか存在していないことの2点としたい。

図1 露天神社の撫牛



図2 妙円寺松ヶ崎大黒天の撫牛



撫牛については拙稿「撫牛をめぐる言説分析―「撫でる」まじないの論理解明にむけて―」にて初出から現代までの事例を分析し、撫牛を撫でる際の論理は「撫牛の上位に神を想定し、撫牛を撫でることは神への祈りの補助的な立ち位置になる」場合と、「撫牛自体に何かしらの力を認め、撫でることによってその力を摂取する」場合の2つであると考察した¹⁸。ここではその2つの典型例を挙げ、再検討してみたい。まずは、大阪府の露天神社の撫牛（図1）である。

神牛舎

「神牛さん」「撫で牛さん」と呼ばれ、己が身体の病む処と、神牛さんとは交互に撫で摩り、身代わりになっていただく。

又は、神牛さんの霊力をもって病を治癒して戴く、という信仰が古来より続いている。

昨今は、より頭脳明晰にならんとし、勉学に励み、又、受験を控える学生も多数参詣される。

菅原道真公（天神さん）と神牛さん

菅原道真公の御生誕が、丑の年にあたる承和十二年六月二十五日の丑の刻にして、薨去の後、太宰府にて初めて祭祀を営まれたのも、延喜五年八月十九日という丑の年、丑の日でありました。

又、御存命中こよなく牛を愛で給い、或る夜、奇夢をごらんになられてより、一層牛を大切になされ、自ら牛の姿を画かれて、これを日常親しく祀られたと伝えられる。

露天神社は天神信仰の神社であり、御祭神を天神、すなわち菅原道真とし、牛を神使として位置付けている。撫牛を撫でる方法については「己が身体の病む処と、神牛さんとは交互に撫で摩り、身代わりになっていただく。又は、神牛さんの霊力をもって病を治癒して戴く」とあるため、撫牛は天神の神使として力を持つ存在であり、撫でるしぐさによって身代わりになってもらう、または、霊力によって病を治癒してもらうことができることが分かる。したがって、身代わりになってもらう際には、まず手に病を移し、一時的に手で保持したのちに、病を撫

牛に移すという意識が見られる。そして、撫牛の霊力で治してもらう際には、まず撫牛の力を手に移し、一時的に手で保持してから、撫牛の力を患部に移すことで治療を期待している。このように、人から撫牛へ、撫牛から人へという方向性の違いこそあれど、撫でるしぐさに期待されていることは力や病気を移すということである。

次に、京都府の妙円寺松ヶ崎大黒天の撫牛（図2）についてである。先の露天神社の撫牛がかなりの大きさで銅製であるのに対して、この撫牛は形態が大きく異なり、机の上における程度の大きさで、土焼き黒塗りである。以下は妙円寺松ヶ崎大黒天の掲示である。

開運大黒天 なでうしをさずくるのわけ 撫牛授与之縁起

抑も当山は、京洛の北、子丑の方位に当り大黒天神の適地なるを以て開山
そもそ とうざん きょうらく きた ね うし ほう い あた だいこくてんかんじょう てきち もつ かいざん
 日英聖人の代、此霊神を感得祭祀せらるるや常に宝前に臥牛の像を安置して
にちえいしやうにん よ この か み かんとかまつり つね みまえ ね うし ぞう あんち
 日夜に祈念し給う。当時洛陽の商人某聖人の高德を慕い来りて教を請く。
ある ひ どうのうち ね うし ぞう あんち み あやし そのわけ と しょうにんなんご そのえんぎ
 或日堂内に臥牛の像を安置せるを見怪みて其故を問ふ。聖人懇ろに其縁起
しめ たま それがしただ そのぞう かいもと かいげん こ しょうにんすなわうしのとうしのつきうしのひ
 を示し給う。某直ちに其像を買求めて開眼を請う、聖人即ち丑年丑月丑日
うしのこく かいげん じゅよ そのひとしんじゅくよう かうん ひ さかえ すらねん いで
 丑刻に開眼して授与せらる。其人信受供養したれば家運日に繁昌し数年を出
とうしゅいとん とみ いた このことあまねく せじん し ところ きた
 ずして陶猗の富を致せりと。此事普く世人の知る所となり、来りて請うも
はなは おお つい れい こんにち およ
 の甚だ多く遂に例となりて今日に及べり。

撫牛と開運 なでうし かいうん 此牛の眉間には大黒天神の像を戴き、
このうし したい だいこくてんじん ぞう いただ か た み つ た ま お
 肩上に三個の宝珠を負う
かいうん きつそう かたど ね うし しじん しょう かみだなとこ まある い つくえのう え
 て開運の吉相を象れば、子丑の支神とも称す。神棚床の間或は座右卓上に置
つね だいこくてん ねん このうし な さす と き うんめいし だい ひら しょうんじょうじゅ
 き、常に大黒天を念じて此牛を撫で摩る時は運命次第に開け所願成就するも
 のなり。去れば之を開運の撫牛と云う。

臥牛と魔除 ね うし まよけ 此牛の像は、甲子の吉日丑刻に大黒天神の宝前に於て開眼せ
きのえね だでうし ひとびと だでうし う うこんもめん ふとん し さいふ このうし はらのなか
 しものなれば、信念の力能く悪魔の障碍を除き吉事自ら至る。依て、之を
 魔除の臥牛と云う。

病難除と臥牛 びやうなんよけ ね うし も からだ やまい かん と き とく だいこくてん きねん このうし
 若し身体に病痛を感ずる時は、特に大黒天を祈念して此牛を
さ やまいいたみし ぜん しょうめつ ゆえ びやうなんよけ ね うし い
 摩すれば病難症傷自然に消滅す。故に病難除の臥牛とも云うなり。

甲子と撫牛 きのえね だでうし ひとびと だでうし う うこんもめん ふとん し さいふ このうし はらのなか
 信者此撫牛を請けて黄染木綿の蒲団を敷き財布を此牛の腹中に

い きのえねごと きんぎん か こだ ま るい ひとつ い おき だいこくてん まつ このうし な
 入れ甲子毎に金銀貨小玉の類を一個づつ入れ納めて大黒天を祭り、此牛を撫
 さす きねん さいなんびとうま はろ うんめい つよ おのずから さいほう え いえのうちますます
 で摩りて祈念すれば災難病魔を排うて運命強く自然に財宝を得家内益々
 はんえい ふかくしんじゅ
 繁栄す深く信受すべきものなり。

妙円寺松ヶ崎大黒天は大黒天を本尊とする寺であり、この撫牛も大黒天信仰の一環としての色が強い。「子丑の支神^{ねうし しじん}」という呼称からは明らかに大黒天の神使として位置付けられていることがわかる。ここまでは先に紹介した露天神社の撫牛とさほどの違いは見られないが、「常に大黒天を念じて此牛を撫で摩る時は^{うんめいしだい ひら しょうんじょうじゅ}運命次第に開け所願成就するものなり」とあるので、妙円寺の撫牛は撫でることだけでなく、大黒天への祈りをも必要としていることがわかる。そして、この撫牛は諸願成就を効能とするが、大黒天に祈願するということが必要とする以上、それを達成するのは撫牛ではなく、大黒天であると考えられる。つまり、この撫牛は力を持たず、大黒天の神使として人と大黒天の間に立ち、大黒天への祈願の一部として行われているのである。そのため、撫牛を撫でることで得られる効能は大黒天信仰と一致しており、さらには、撫牛を撫でるだけでまじないとして完成するのだと考えられる。以上を踏まえて撫でるしぐさの役割を考えると、大黒天への祈願の補助として撫でるしぐさが用いられていると考えられる。

上記2例は撫牛に見られる撫でるしぐさについての2つの異なる認識の典型例であるが、撫牛においては牛の取り扱い方も指摘しておく必要があるだろう。上記では牛を神使と捉えていたが、以下のように神使でなくても撫牛は成立するようである。

撫牛人形 但し吉事ある度々ふとんをこしらへ重ね敷べし。

牛は長命にして数百貫目をも重しとせず、人のため運送し又は耕作のたすけ第一にて、国益ある獣なり。天満宮もこれを愛したまふといふ。此なで牛を小ふとんの上にせ居間に祭りて、毎朝茶をそなへ、月の朔日には赤小豆^{あづきめし}を備ふべし。必家富さかふべし。

なでうしを日なたへ出すやすゝはらひ¹⁹

上記は初版年不明、1853（嘉永6）年再版とされる「お手遊び ひな人形の故実」から抜粋したものであるが、牛の使役動物としての有用性が強調されている。撫牛を撫でるというまじないは必ずしも神仏に依る必要はなく、牛の有用性から敷衍することによっても成立するのである。このように、撫でる縁起物は、その動物の取り扱い方も多様である。次章以降でも、動物の取り扱い方についても注視する必要があるだろう。

2. うさぎを撫でる

本章ではうさぎを撫でる「撫でうさぎ」について分析していく。まず、大阪府住吉大社では2011年に「住吉神兎」が奉納されている²⁰。このうさぎについては2013年に奉納された立札を参照したい。

糸魚川産 ひすい 翡翠 住吉神 うさぎ 兎

住吉大社の御鎮座が卯年、卯月、卯日であることに因み、うさぎは住吉大社の神使おつかいとされています。

五体なを撫でて「無病息災」を祈願してください。

管見の限りでは、住吉大社の撫でうさぎについての説明はこれ以外見られず、この立札には神使がうさぎであること、撫でて「無病息災」の祈願をすることしか書かれていない。「無病息災」は住吉大社の御神徳としては設定されておらず、なぜ無病息災の効能があるのかは判然としない。また、「無病息災」が住吉大社の御神徳でないならば、うさぎへの祈願として撫でるのであるうか。いずれにせよ、撫でるしぐさは祈願の補助として用いられていることは指摘できよう。

京都府出雲大神宮でも撫でうさぎが見られる。これは2016年に氏子より奉納された石像で、「しあわせ、なでうさぎ」と命名された（図3 筆者撮影）。境内にはこのうさぎについての説明は見られないが、HPにて説明が掲載されている。

「しあわせ、なでうさぎ」は、日本神話「古事記」に出てくる「因幡の白兎」で、当宮ご祭神である大国主命様に助けられました。

神様のお使いである白兎は、飛び跳ねることから運氣の上昇や飛躍を象徴する動物とされ、体をなでることで幸せが訪れると言い伝えられています。また、ご自身の体の痛い部分と同じ所をなでると痛みや病気を除去するとも言われております。

当宮では、一ノ鳥居の前にございますので、どうぞ優しくなでて頂きますれば、大国主命様のご守護と共に皆様の幸せをご祈念いたします。²¹

まず、文末に「どうぞ優しくなでて頂きますれば、大国主命様のご守護と共に皆様の幸せをご祈念いたします」とあるように、この撫でうさぎはうさぎを大国主命の神使として、大国主命への祈願の一部としてうさぎを撫でていると考えられる。しかし、文中にはこれと異なる意識も見られる。まず、うさぎの生物的特徴として飛び跳ねる点を挙げ、それが運氣の上昇や飛躍を象徴するものとして神使であることよりもうさぎであることが幸運の効能を持つ根拠とし

図3 しあわせ なでうさぎ



て強調されている。ここでは、撫でるしぐさはうさぎのご利益を受けるために用いられていると考えられる。また、自分の痛むところと同じ所を撫でると、その痛みや病気が治るとして、治療の効能も持つという。しかし、なぜ治療の効能を持つのかについての説明は見られず、また、これまで見てきたものと異なり、参拝者が自分を撫でることを必要としない。治療の効能のために必要なのは同じ場所を撫でているということであり、その中で撫でるしぐさは効果の出る場所を指定するという役割を担っていると考えられる。ただし、「ご自身の体の痛い部分と同じ所をなでると痛みや病気を除去する」という文面を詳しく見ると、うさぎ、もしくは大国主命が「痛みや病気を除去する」と読むことができる。そのため、どちらかへの祈願が前提とされていると考えられ、これは祈願の補助の一環としてみなすことができるだろう。

最後に、京都府岡崎神社の撫でうさぎを紹介する。岡崎神社では、御祭神を速

素盞鳴尊、奇稻田姫命、三女五男八柱御子神として、速素盞鳴尊に縁のある神を祀っている。うさぎはそれらの御祭神の性格やまつわる伝説とは関係しないが、以下のような説明によって氏神の神使とされている。

御神徳

子授け・安産

ご祭神二柱が三女五男八柱神ものたくさんの御子神をもうけられ子宝に恵まれた霊験あらたかな子授け安産の神である。また、往時境内を始め地域一帯が野うさぎの生息地で、多産なうさぎは古くから氏神様の神使いと伝えられる。治承二年には中宮も御産の際に安産の祈願をされた。安産の神としての信仰は厚く、腹帯を持ち込み祈願する慣わしがある。

うさぎが多産であるという特徴が強調され、そこから転じて子授けや安産の効能を持つ御祭神と結び付けられている。氏神の神使であるとの記述だが、多産であるという御祭神との共通点によって神使として設定されている。ここでは、氏神と御祭神は同一視されている。そして、この意識が強く見られるのが、「狛うさぎ」（図4 筆者撮影）である。以下は境内にある立て札の記述である。

縁結び夫婦和合 狛ウサギ

右の阿形が雄、左の吽形が雌うさぎ。うさぎはご祭神の神使い、^{すさのをのみこと}素盞鳴尊と^{くしいなだひめのみこと}奇稻田姫命の縁にあやかり、狛うさぎを撫でて祈願いたします。

岡崎神社> 務所

岡崎神社には狛犬の代わりに狛うさぎが安置されているが、この2体の狛うさぎは撫でることが推奨されている。そして、この説明では素盞鳴尊と奇稻田姫命の神使とされており、「狛うさぎを撫でて祈願いたします」とあるのは御祭神である2柱への祈願の補助として撫でるしぐさが用いられているのだと考えられ

図4 狛うさぎ



る。

また、岡崎神社にはもう1つ撫でうさぎがあり、それは「子授けうさぎ」(図5 筆者撮影)と名付けられた御影石製のうさぎである。以下に境内掲示を引用する。

黒御影のうさぎ

子授け祈願

境内の手水舎に黒御影のうさぎ像が立っています。水をかけてご祈願ください。子授け御守授与と祈祷受け付けます。

うさぎのご祈願

月を仰ぎ、力を体に満たしたうさぎです。

子授け安産を始め各々のご祈願を祈りうさぎに水を掛けてお腹をさすってお参りください。

東天王岡崎神社 務所

図5 子授けうさぎ



このうさぎは「月を仰ぎ、力を体に満たしたうさぎ」として、月から力を授かったとされている。そして、子授け安産などの諸願成就を祈ってうさぎを撫でるのだという。撫でるしぐさは祈願の一部(補助)として用いられており、ここからはうさぎの力は人々の祈願を受け、それを叶える力であると考えられる。また、ここでの祈願は神への祈願ではなく、うさぎへの祈願であるという点も特徴的である。

3. 亀を撫でる

本章では亀の像を撫でる「撫で亀」について考察していく。「鶴は千年、亀は万年」として、鶴とセットで語られ、寿命長久、家庭円満の縁起物としてよく知られる亀であるが、京都府の松尾大社の神使であるという一面も持つ。そして、松尾大社では現在、2つの「撫で亀」が安置されている²²。まず1つは、松尾

大社 HP でも紹介されている「幸運の撫で亀」である。これは氏子の奉納物であり、効能は寿命長久、家庭円満だという。この撫で亀について、境内では立て札で「撫でてご祈念ください」と一言添えてあるだけだが、HP でかなり詳しい説明がなされている。

御本殿正面門の左右両側に、大神様のご神徳を広くご参拝の皆様方にお受けいただくために、“幸運の双鯉（そうり）”と“幸運の撫で亀”が氏子崇敬者の皆様から奉納されました。

松尾大社の神使い “亀と鯉”

松尾大社では、大神様が太古、山城丹波の国を拓くため保津川を遡られる時、急流は鯉、緩やかな流れは亀の背に乗って進まれたと伝えられ、以来亀と鯉は神のお使いとして崇められております。

お伊勢さんの鶏、お稲荷さんの狐、天神さんの牛など、古くから人々は、神を敬うと同時に、その神と縁故のある鳥や獣などをその神のお使いとして尊崇して参りました。この故事に倣い、亀は不老長寿、鯉は出世開運の御守護としてその御姿を表しております。ご参拝の皆様、末永く大神様のあらたかなお恵みをお受け願います。²³

上記のように、松尾大社に「幸運の撫で亀」及び「幸運の双鯉」が氏子に奉納されたこと、亀と鯉が神使であることの簡単な由緒が述べられている。末尾に「ご参拝の皆様、末永く大神様のあらたかなお恵みをお受け願います」と述べられていることから、これら2つの縁起物は松尾大神への祈願のために撫でられるのだと考えられる。つまり、撫でるしぐさは祈願の補助として用いられているのだと考えられる。

そして松尾大社に安置されているもう一つの撫で亀は「撫で亀さん」と名付けられ、こちらは神社 HP では紹介がされておらず、比較的新しいものであると推察される。以下には立て札に書かれた由緒を引用する。

撫で亀さん（神使の「亀」）

古来「亀」と「鯉」は松尾大神様のお使いと伝えられています。中でも「亀」は健康長寿のシンボルとして親しまれてきました。直接手をお触れになりその靈威にあやかっ^なてご利益をお受け下さい。

撫で亀の靈威福呼び淑氣満つ 正二

この撫で亀は撫でると健康長寿の効能があるとされ、「直接手をお触れになりその靈威にあやかっ^なてご利益をお受け下さい」という文言からはこの亀には力（靈威）があり、撫でることによってその力（靈威）を受け取ることができるという認識が見られる。この力（靈威）の源泉は亀が神使であることに求められている。したがって、「幸運の撫で亀」では神使であるから松尾大神への祈願の補助として用いられていたが、「撫で亀さん」では神使であるから、力を持つ存在として見られているのだと考えられる。

また、松尾大社における亀の効能は健康や長寿であるとされている。この点について、本章冒頭で述べたように、亀は寿命長久、家庭円満の縁起物としてよく知られていることと関わりがあるのではないかと考えられる。撫牛や撫でうさぎと同様に、撫で亀も背景となる神仏だけでなく、その動物が持つ特徴の影響も受けているのではないだろうか。

撫で亀については、撫牛と同様に、神使でなくとも成立する事例が見られる。長野県の妙光寺弁天堂は、弁財天を祭る日蓮宗の寺のお堂だが、2014年に「報恩の白龜様」（図6 筆者撮影）が奉納されている。その境内の掲示には以下のように書かれている。

お題目（南無妙法蓮華經）を7回、唱えながら宝珠の玉を撫でて下さい。
その後、御自分の良くなって欲しい所をおさすり下さい。

これは白い亀の上に置かれ、「南無妙法蓮華經」と書かれた金色の球体と自分を交互に撫でると自分の悪いところが治るということである。厳密に言えば、撫でるところは「宝珠」であり、亀ではないのだが、「報恩の白龜様」という名前

から、宝珠は亀の一部として捉えるべきであろう。そして、撫でるしぐさはお題目を唱えながら撫でることと、亀と自分を交互に撫でることが必要とされている。お題目を唱えるということは日蓮宗の寺の施設であることからきているのだろうが、自分と亀を交互に撫でるということは手に亀の力を移し、亀の力を患部に移すということである。したがって、この場合の撫でるしぐさは亀の力を自分に移すという意識が見られる。

この亀の立場についてはかなり曖昧だと言える。まず、弁財天の神使を亀とすることはあるが、妙光寺では神使として意識されていないようである。この亀と妙光寺弁天堂については立て札にて以下のような記述が見られる。

弁財天縁起

当山に安置される弁財天は、日本三大弁財天（広島県厳島大願寺、鎌倉の江島神社、琵琶湖竹生島宝厳寺）のひとつ厳島弁財天の分身です。

一六五八年広島城浅野家より上田城千石忠俊侯にお興入れになった亀姫様が守り本尊として奉持してきたものです。

二〇〇八年捧安三五〇年大祭、二〇〇九年亀姫様尊像制作、二〇一三年亀の五重塔制作、二〇一四年報恩の白亀様制作。弁財天はインドの水の女神サラスパティーで、音楽・芸能・財宝。智恵・勝利・福德の利益があります。どうぞご参詣下さい。

二〇一四年十一月二十三日 妙光寺弁天堂

図6 報恩の白亀様



妙光寺の弁財天は亀姫が奉持してきたものであるということが強調され、その文脈で亀にまつわる縁起物が制作されているような示唆を受ける文章である。制作者や寺が弁財天の神使として亀を捉えている可能性は否定しきれないが、ここで重要なのは参詣者の視点であり、参詣者はよほど博識でない限り、この掲示を

見て亀姫との関連性で亀を捉え、弁財天の神使として捉える可能性は低いだろう。また、「報恩」、「白」という要素も制作者としては何かしらの意図があったのであろうが、掲示やパンフレットに説明がなく、弁天堂が無人である以上、参詣者にその意図は伝わらないと考えられる。

4. 動物の特徴と撫でるしぐさの意味

前章までは動物ごとに区別して事例を述べてきたが、ここで一度事例を概観し、撫でられる動物の特徴について再度整理してみたい。

まず、撫でられる動物は神使であることが多い。しかし、一言に神使といっても、その立場は2つに分けられる。すなわち、参拝者による神仏への祈願の一部となるものと、神使であることから力を認められるものである。これらは安置されている寺社の解釈によるだろう。また、牛や亀のように神使でなくても撫でられるものも見られた。これらは使役動物としての有用性や寺社にまつわる伝説などを立脚点とし、その動物に力を認めていた。

次に、撫でるまじないの根拠という観点から見ると、背景となる神仏が強調される場合と、その動物の特徴に由来する意味が強調される場合が見られた。これは牛の有用性や、うさぎが多産であることからの安産祈願、縁起物としての亀の長寿などのことを指す。

このように考えると、撫でるしぐさが担う意味は動物が神使であり、背景となる神仏への祈願の一部となる存在である場合、「祈願の補助」であると考えられる²⁴。そして、動物を何かしらの力が認められる存在だとしている場合、撫でるしぐさは「手を介して力の授受を行う」という認識と「まじないの利益を受ける」という認識の2つに分けられると考えられる。この点について、以下に2つの事例を挙げて説明する。

まず、「手を介して力の授受を行う」という認識について、京都府東寺の最眞(図7 筆者撮影)を紹介したい。最眞は亀に似ているが、中国の想像上の動物であり、竜の子だとされている。京都府東寺では、「万病ぬぐい」という最眞を撫でるための白い布を以下のような説明書とともに頒布している。

東寺国宝御影堂（大師堂）南側の石塔群の中に石碑が亀の背に建ち一際目立つ尊勝陀羅尼（そんしょうだらに）碑があります。幕末嘉永年間に天台宗の千日回峯行者が北野天満宮（京都市上京区）に建立しましたが、明治の神仏分離で東寺に遷されました。亀に見えるのは中国の想像上の動物の鼈（ひいき）で、竜の子とされ、重い物を背負う事を好み、甲羅に建つ石塔は永遠不滅と言われ、古来より石柱・石碑・墓の土台に用いられております。いつの頃からか、この石碑の周囲を回りながら亀に似た鼈の体を撫でて自分の患部を擦ると万病に効くと信仰を集めております。

この度この鼈の御力を頂く【万病ぬぐい】の布を作りました。使い方は、この布で鼈を擦り、自身の患部を擦って頂きます。傷病が治ったり効果が薄くなったと感じたら、尊勝陀羅尼碑の後方にある布納めの棒に結んで納めて下さい。

中国の想像上の動物として鼈を紹介し、鼈を撫でることについては慣習であるとの説明がされている。明らかに鼈に力があると認識されており、その力の由来は神仏ではなく、想像上の動物であり、「竜の子とされ、重い物を背負う事を好み、甲羅に建つ石塔は永遠不滅」と言われていることに由来するのだと考えられる。

そして、鼈を撫でる方法について、「この石碑の周囲を回りながら亀に似た鼈の体を撫でて自分の患部を擦る」、もしくは、「この布で鼈を擦り、自身の患部を擦って頂きます」と説明されている。つまり、ここでは、手（布）に力を移し、その後、自分に力を移すといった認識で撫でるしぐさが用いられているのである。撫でるしぐさに対する「手を介して力の授受を行う」とは、このようなものとまじないの行為者を交互に撫でるものに見られるのである。

次に、「まじないの利益を受ける」という認識を代表するものとして、鳥取県

図7 鼈



恋谷橋にある「縁結びのかじか蛙」(図8 筆者撮影)について紹介する。この事例について、まず特徴的なのは寺社に安置されていないという点である。鳥取県三朝町の三朝温泉街は、かじか蛙の名所として有名であり、この「縁結びのかじか蛙」も観光名所の1つとして恋谷橋を渡る途中に安置されている。かじか蛙は求愛の鳴き声が美しいとして和歌の題材や俳句の夏の季語になっており、その特徴を背景として、立て札にて以下のように説明されている。

このカエルは、縁結びのかじか蛙として親しまれており、撫でることで、ご縁を授かる事が出来ます。良縁成就、恋愛成就、夫婦円満、子孫繁栄

撫でるしぐさによってかじか蛙とのご縁を授かることができるという。ただの蛙に対してご縁を授かっての意味はないので、この蛙も力を認められていると考えられるが、先述した最良とは異なり、これは動物とまじないの行為者を交互に撫でることは要求されていない。つまり、この蛙を撫でるという行為(まじない)がご利益を受けるということを意味しているのである。そこには手という身体部位への意識はなく、行為全体として認識されているのだと考えられる。

図8 縁結びのかじか蛙



おわりに

本稿では、動物の像を撫でるというまじないの分析を通して、撫でるしぐさに対する認識を検討してきた。

まず、撫でるしぐさは「祈願の補助」という意味を担っていた。これは動物が神仏の神使として位置付けられており、動物の像を撫でることが祈願の一部に組み込まれた場合に見られた認識である。次に、「手を介して力の授受を行う」という認識も見られた。これは動物に何かしら力が認められ、動物とまじないの行

為者を交互に撫でる場合に見られた。そして、最後に「まじないの利益を受ける」という認識について述べた。これは動物に何かしらの力が認められ、動物を撫でるだけで成立する場合の認識である。撫でるという行為がその結果を表象しているのだと考えられる。

これら3つを身体部位という観点から考察すると、「手を介して力の授受を行う」という認識下では、まじないとしての撫でるしぐさが手という身体部位の問題として考えられているのに対して、他の2つでは身体全体の問題として考えられていることが指摘できる。

さらに、「手を介して力の授受を行う」という認識下では撫でるしぐさは「授受」という双方向性を持っているという点も興味深い。これについては、撫でるというしぐさの特徴に由来するのではないだろうか。すなわち、撫でるしぐさは行為者による積極的な接触のしぐさであることは先に述べたが、その一方で、撫でるしぐさは触覚を刺激し、触覚情報を受信するしぐさでもある。そのため、撫でるしぐさへの認識においても双方向性を持ったのだと考えられる。

本稿によって撫でるしぐさをめぐるまじない、縁起物の諸相の一端が見えたのではないだろうか。これは現代におけるまじないの世界の一端であるとも言える。そして、撫でるしぐさを必要とするまじない、縁起物は数多く残っている。特に撫で仏などの人型の像を撫でるものや石を撫でるものなどは今後考察の範囲に入れるべきものであると考えられる。また、現代も撫でる縁起物は次々と制作、奉納されている。この新たな動きについても分析、考察する必要があるだろう。

注

- 1 國學院大学民俗学研究会「鳥取県岩美郡岩美町旧小田村」(『民俗探訪 昭和44年度』、1970年) 2-60頁
- 2 高田十郎「各地のいひならはし(其六)」(『なら』32、1925年) 1-8頁
- 3 岡本昆石『あづま流行時代子供歌』、1894年(志田延義編『続日本歌謡集成 巻五 近代編』(東京堂出版、1962年、127-156頁)所収)
- 4 倉石忠彦『身体伝承論—手指と性器の民俗—』(岩田書院、2013年)
- 5 ちくま日本文学015「涕泣史談」(『柳田國男』筑摩書房、2008年)
- 6 常光徹『しぐさの民俗学—呪術的世界と心性—』(ミネルバ書房、2006年)
- 7 柳田國男『現代史学大系 第七巻 民間伝承論』(共立書店、1934年初版)、同『郷土生活の研究法』(刀江書院、1935年初版)(柳田國男『柳田國男全集 第八巻』(筑摩書房、1998年)所収)
- 8 後に「応」は「兆」に対応する結果であるとして、「応」を「兆」の一部とし、「応」の代わりに積極的に未来のことを予知しようとする「占」を入れて四分類としている。
- 9 井之口章次『日本の俗信』(弘文社、1975年)
- 10 小嶋博巳「「俗信」覚書—概念の再検討に向けて—」(『民俗学評論』23、1983年) 38-52頁
- 11 福澤昭司「病と他界—長野県内の麦粒腫の治療方法の考察から—」(『日本民俗学』172、1987年) 42-64頁
- 12 一方で、福澤と板橋は俗信を一見非体系・断片的であるが、深層では体系的であるとしている点において一致しており、板橋は福澤の研究を高く評価している。
- 13 板橋作美『俗信の論理』(東京堂出版、1998年)
- 14 国際日本文化研究センター「怪異・妖怪伝承データベース」(<https://www.nichibun.ac.jp/YoukaiDB/>)
- 15 国立歴史民俗博物館「俗信データベース」(<https://www.rekihaku.ac.jp/doc/zoku.html>)
- 16 茶園直人「撫牛の初出と展開」(『日本語・日本文化研究』第29号、2019年) 350-359頁
- 17 前掲 茶園 2019年
- 18 茶園直人「撫牛をめぐる言説分析—「撫でる」まじないの論理解明にむけて—」(『説話・伝承学』第29号、2021年) 105-117頁
- 19 清水屋「お手遊ひな人形の故實」72頁(山田徳兵衛『京洛人形づくし』(芸艸堂、1938年)所収) 国立国会図書館デジタル資料
- 20 なお、現在は新型コロナウイルスへの対策として、実物を撫でることはできなくなっており、写真を撮ることもできなかった。
- 21 出雲大神宮ホームページ「境内マップ」(<http://izumo-d.org/keidai.html>) 2021年10月

27 日閲覧

- 22 なお、現在は新型コロナウイルスへの対策として、実物を撫でることはできなくなっており、写真を撮ることもできなかった。
- 23 松尾大社ホームページ「松尾大社について」(<http://www.matsunoo.or.jp/about04/>) 2021 年 10 月 27 日閲覧
- 24 動物に祈願するというものもあったが、事例数が少なく、重大な相違点はないと考えられるため、これに類するものとする。

付 記

本研究は、日本科学協会の笹川科学研究助成による助成を受けたものです。

チャエン ナオト（大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程）

A Magic of Stroking an Animal Statue

-On the perception of the gesture-

CHAEN Naoto

As a part of my research on magic and lucky charms related to stroking gestures, this paper focuses on the stroking of animal statues and discusses the perception of stroking gestures found in this context.

In this paper, we have first taken up the various magics and good-luck charms associated with the stroking gesture, and the fact that even today, good-luck charms are made and dedicated to the shrines or temples. In addition, we pointed out that these are important in that they allow us to reevaluate magics that were considered to have been lost in the past from the viewpoint of the stroking gesture, and placed this paper in the study of "physical tradition" proposed by Kuraishi. Later, we referred to Tsunemitsu, who analyzed this gesture from a folklore perspective and presented a problematic view of gesture in folklore. Then, based on Yanagita's four categories of witchcraft, we defined the premise of the stroking gesture in magic, and referring to Itabashi's discussion, we presented the view of magic in this paper.

The cow, tortoise, and rabbit were taken up as magics for stroking animal statues. In analyzing these cases, I examined the perception of the stroking gesture. The position of the animal being stroked was sometimes that of a divine messenger, but sometimes that of a non-divine messenger. Also, it was pointed out that some magics were established based on the characteristics of the animal, and some aspects of stroking lucky charms were clarified.

We noted three perceptions of the stroking gesture: "aiding in prayer," "giving and receiving power through the hands," and "receiving the benefit of a spell. These vary depending on the type of animal being stroked. In addition, we noted the differences in perceptions toward the body and awareness of directionality that we found among them.